



コールセンターからの小さなよみもの

2018年7月31日

Vol.114

欧州

トンネルの出口が見えてきた？！

ユーロ圏の経済成長が堅調に続く中、ECB（欧州中央銀行）は量的金融緩和を段階的に縮小させてきましたが、ついに終了の時期を迎えようとしています。

量的金融緩和終了後の金融政策については、慎重な姿勢も示されていますが、米国に続く正常化に向け動き出しました。

今回は、ECBの金融緩和からの出口戦略について押さえていただきたいと思います。





2008年に起こったリーマンショックから9月で丸10年が経とうとしています。当時、100年に一度の金融危機とも言われ、世界経済は大きなダメージを被りました。各国中央銀行は、こうした金融危機への対応として政策金利の引き下げを行ない、また国債などを買い入れ、市中へ大量に資金を供給する量的金融緩和を実施して、経済活動を高めるよう努めました。

ユーロ圏でも、ECBはマイナス金利を導入、量的金融緩和を行ないました。その後も買い入れ対象資産を広げ、さらに金額も増やして量的金融緩和の規模を拡大しました。その結果、徐々に景気の明るさが見え始めたことから、2017年4月以降、買い入れ金額を徐々に減らす一方で、資産購入の終了時期を延ばしながら、徐々に金融緩和の縮小を開始しました。そして、今年6月のECB理事会では、今年末で新たな資産購入を打ち切るとして、量的金融緩和の終了を決定しました。リーマンショック発生から10年という時間がかかりましたが、いよいよユーロ圏も危機対応から平時対応へと、金融政策の正常化に向けて舵を切ることになります。

量的金融緩和政策が終了したならば、次のステップは利上げです。2008年10月には3.25%であった中銀預金金利(下限金利)は現在マイナス0.4%であり、金利水準も正常化に向けてマイナス金利を脱したいところです。足元、米国による輸入制限といった保護主義政策や、イタリア政局の混乱などが懸念され、ユーロ圏の景況感はやや軟化がみられることから、ECBのドラギ総裁は利上げ開始には慎重な姿勢を示していますが、将来景気が悪化した際に取り得る金融政策に幅を持たせるためにも、金利水準について徐々に正常化を進めていくとみられます。利上げの期待が高まると、為替面での影響として、日本との利回り差が拡大し、利回り魅力が高まるユーロは、上昇傾向が現れやすくなると考えることもできます。

金融政策では、利上げに加え、過去の量的金融緩和で大量に買い入れた保有資産の縮小を始めている米国が先行していますが、欧州もようやくその背中を追い始めました。経済情勢や市場動向を見極めながらも、金融緩和の出口へと向かうECBの金融政策には、今後も注目が集まりそうです。



nikko am



コールセンター

0120-25-1404

営業時間 平日 9:00~17:00